世辞屋

三遊亭円朝

青空文庫

エヽ商法も様々〳〵ありまするが、文明開化の世の中になつて以来、何でも新発明新発明といふので追々此新商法といふものが流行をいたしまする。彼の電話機械といふものが始めて参つた時に、互に掛やうを知らぬから、両方で話をしようと思つても、何うしても解らなかつたといふ。夫は何ういふ訳かと後で聞いて見ますると、耳へ附けべき器械を口へ着けてやつたからだといふ。夫では聴えないから解らない筈です、夫から又蓄音器といふものが始めて船来になりました時は、吾人共に西洋人の機械学の長けたる事には驚きました。実に此音色を蓄へて置く等といふは、不思議と申すも余あることでござりまする。殊に親、良人、誰に拘らず遺言抔を蓄へて置いたら妙でござりませう。幾度掛けてもチヤンと、存生中に物言ふ通り、音色が発するのだから其人が再び蘇生て対話でもするやうな心持になるのだから、大きに是は追善の為に宜からうと考へられまする。

此器械を台にして其上へ又一工夫いたした人がある「何うも是は耳へ附けて聴くのに、ギン〳〵と微かに聴えて判然解らぬやうだが、何うか斯う耳へ当ずに器械をギユーと捩ると、判然音色が席中一杯に大音に聴えるやうに仕たいものだ。日本人種といふものは却々器用でござりますから、忽ち一つの発明をいたし、器械が出来て見ると、之に就いて一つの新商法の目論見を起しました。「見渡すに現今の世界は交際流行で、何うも此世辞は要らぬ事だと云ふけれど、是も言葉の愛で何うしても無ければならぬものだ、世辞に疎い性来の者は、何様に不自

由を感じて居るかも知れぬから、種々〳〵の世辞を蓄へて置いて之を売つたら、嘸繁昌をするであらう。と考へ夫々趣向をいたし、一々口分にして番号札を附け、ちやんと棚へ、何商法でもお好次第の世辞があるといふ迄に準備が出来た、之で開店するといふのだが、何うも家屋の構造が六かしい、余り烈しい往来中ではいかず、と云つて衆人の目に立たぬければ不可から、入口を横町へ附け、表の方は三四間の所を細かい格子作に拵へ、往来の方へ看板を懸ました。同じ事でも妙なもので、料理茶屋から大酔致し咬楊子か何かでヒヨロ〳〵出て直に腕車に乗る抔は誠に工合が宜しいが、汁粉屋の店からは何となく出にくいもの、汁粉屋では酔ふ気遣はない、少し喰過て靠れて蒼い顔をしてヒヨロ〳〵横に出る抔は、余り好い格好ではござりませぬ。さて此世辞屋は角店にして横手の方を板塀に致し、赤松のヒヨロに紅葉を植込み、石燈籠の頭が少し見えると云ふ拵にして、其此方へ暖簾を懸け之を潜つて中へ這入ると、格子戸作になつて居ましてズーツと洗出の敲、山づらの一間余もあらうといふ沓脱が据ゑてあり、正面の処は銀錆の襖にチヨイと永湖先生と光峨先生の合作の薄墨附立書と云ふので、何所迄も恰当な拵、傍の戸棚の戸を開けると棚が吊つてあつて、ズーツと口分を致して世辞の機械が並んで居る。其此方には檜の帳場格子がありまして、其裡に机を置き、頬に帳合をして居るのが主人。表の入口には焦茶地へ白抜で「せじや」と仮名で頭し山形に口といふ字が標に附て居る処は主人の働で、世辞を商ふのだから主人も莞爾な顔、番頭も愛くるしく、若衆から小僧に至るまで皆ニコ〳〵した愛嬌のある者ばかり。此家へ世辞を買に来る者は何れも無人相な

イヤアな顔の奴ばかり這入つて来ます。是は其訳で無人相だから世辞を買に来るので婦人「御免なさい。若「へい入らつしやいまし、小僧やお茶を、サ何卒此方へお掛け遊ばして、今日は誠に好いお天気になりました、何卒之へ。婦人「はい、御免なさいよ。ズツと頭巾を取ると年の頃は廿五六にもなりませうか、色の浅黒い髪の毛の光沢の好いちよいと銀杏返しに結ひまして、京縮緬の小紋織の衣類、上には黒縮緬の小さい紋の附た羽織、唐繻子の丸帯を締め小さい洋傘を持て這入て来ました。器量は好いけれども何所ともなしに愛嬌のない無人相な容貌で若「サ、何卒此方へおかけ遊ばして。婦人「アノ私はね、浜町の待合茶屋でございますがね、何うも私は性来お世辞がないんですよ、だもんだからお母さんが、手前の様に無人相ぢやア好いお客は来やしないから世辞を買つて来いと、小言を云はれたので態々買ひに来たんです、何うか私に宜さうな世辞があるなら二ツ三ツ見せて下さいな。主人「へい畏りました、待合さんのお世辞だよ、其の二番目の棚にあるのが丁度宜からう、うむ、よし〳〵、えゝ此手では如何でげせう。ギイツと機械を捻ると中から世辞が出ました。発音器「アラ入らしつたよ、チヨイとお母さん旦那が、何うもまア貴方は本当に呆れるぢやアありませぬか、過日お帰んなすつた切入らつしやらないもんですから、何うなすつたんだらうツて本当に心配をしてえましたよ、然うするとね、お母が云ふのには、お前何か旦那を失策たんぢやアないかてえますから、ナニお前人を失策せるやうな旦那ぢやアないから心配おしでない、でも彼ツ切入らつしやらないには何か理由があるんだらうつて、ふうだノはアだのが姐さん本当に旦那は何うなすつたん

だらう、何か怒つて居らつしやるんぢやアなからうかてつて、痛く彼婦が心配してえるんですよ、ナニお前は失策る気遣はないよ、アノ時奥の見通しに来てエたのは、何うも厭に生なお客だもんだから旦那が変にお思ひなすつたかも知れないが、ナニ彼の方の事なら後でお咄をしても解るんだから、決してお前が失策るやうな事はない、大丈夫だから安心してお出でよ、でも何だか旦那がお怒んなすつたやうで気が揉めてならないわ、だけれども姐さん旦那はね段々長くお側に坐つてると段々好くなつて来ますよ、なんて、アノ重い口から云ふ位だから、まア本当に不思議だと思つてますの、アノ今日は旦那彼をちよいと喚んでやつて下さいよ、アレサ其様な事を云はずに彼も大層心配をしてえますから、姐さん旦那はあれツ切入らつしやらないか、入らつしやらないかツて、度々私に聞きますから、ナニ早晩屹度入らつしやるから其様なに心配をおしでないよツて、云つてるんですもの、おやお従者さん誠に御苦労様今お酢でも上げますから少し待つてゝ下さいよ、ちよいとまア旦那貴方の今日のお召の好いこと、結城でせう、ナニ節糸織、渋い事ね何うも、お羽織のお色気と取合の好いこと、本当に身装の拵は旦那が一番お上手だと皆がさう云つてるんですよ、あのね此春洋服で入らしつた事がありましたらう、黒の山高帽子を被つて御年始の帰に、あの時は何所の大臣さんが入らしつたかと思つた位ですよ、本当に旦那は何を召しても能くお似合なさること、夫に旦那はお優しいから年寄でも子供でも、旦那は入らつしやらないか、入らつしやらないか、とお慕ひ申ます所が誠に不思議だ、あれだけ何うも旦那は萬事に御様子が違ふんだと然う云つてますの、まア二階へお上ん

なさいましよ、まアさ其様な事を云はずに彼を喚んでおやんなさいよ、でないと若い妓を一人殺しちまふやうなもんです、本当に貴方は芸妓殺ですよ、まアちよつと二階へお上んなさいよ」。主人「エヘヽヽ此手では如何でございます。婦人「成程是は頓だ宜うございますね、ぢやア之を一つ戴きませうか。帯の間から紙幣入を出して幾許か払をして帰る時に、重い口からちよいと世辞を云つて往きましたから、大きに様子が宜しうございました。其後へ入違つて這入て来ましたのが、二子の筒袖に織色の股引を穿きまして白足袋麻裏草履と云ふ打扮で男「エヽ御免なさい。若「へい、入らつしやいまし、何うぞ此方へお掛けあそばしまして。客「エヽ私は歌舞伎座の武田屋の兼てえもんでがすが、能く姐さんに叱られるんで、お前のやうに茶屋の消炭をして居ながら、さう世辞が無くツちやア仕やうがねえから、世辞屋さんへでも行つて、好いのがあつたら二つばかり買て来いツて、姐さんが小遣を呉れやしたから、何卒私に丁度宜さそうな世辞があつたら売てお呉んなせえな。主人「へい、芝居茶屋の若い衆さんのお世辞だよ、うむ、其方が宜からう、エヽ此手では如何でございます。と機械へ手を掛てギイツと巻くと中から世辞が飛出しました。発音器「おや何うも是は入らつしやいまし、何うもお早いこと実に恐入ましたねお宅から直に綱曳で入らしつたツて、此様にお早く入らつしやるてえのは余ツ程お好でなければ出来ない事でエヘヽヽ先達は番附の時に上りましたが、何うも彼所から入らしつたかと思ふと実に悔りする位なもので、私も毎度参りますが何うも遠いのに恐入りましたよ、へい御内室さん此間は誠に有難う存じます、エヘヽヽ私はね何うもソノお肴が

結構なのに御酒が好いのと来てえませう、夫にまだ世間には売物にないと云ふ結構なお下物でせう何だか名も知らない美味物許なんで吾知らず大変に酔つちまひました、夫ゆゑ何方様へも番附を配らずに帰つたので、大きに姐さんから小言を頂戴したり何かしました、へい嬢さん入らつしやいまし、何うも先達の二番目狂言へ貴嬢がチヨイと批評をお刺になつた事を親方に話しましたら、大層感心しまして実に恐入つたものだ、中々アヽ云ふ処は商売人だつて容易に気の附くもんぢやアないと云ひました、何卒打出ましたら些と三階へ入らつしやいまして、おや是は坊ツちやま入らつしやいまし、アハヽまアお可愛らしいこと、いえ何うも親方も駄いてましたし、表方の者も皆感心をしてえるんで、坊ちやんがアノ何うも長いダレ幕の間ちやんとお膝へ手を載せて見て居らつしやるのは流石は何うもお違ひなさるツてえましたら親方がさう云ひましたよ、夫ア当然よお前のやうな痴漢とは違ふ、ちやんと勧善懲悪の道理がお解りになるから飽かずに見て居らつしやるのだ、若し其道理が解らなければ退屈して仕舞ふ訳ぢやアないか、と云はれて見ると成程と思つて愈々恐入ましたんでエヘヽちやんと何うも眼も放さずに見て居らつしやるなんて本当に違ひますな、イエまだ早うござす、左様でげすか、入らつしやいますか、ぢやアお兼どんお蒲団とお煙草盆をヘイ行つていらつしやいまし」。主人「エヽ此辺では如何でござります。客「エヽ是は宜うがす、ナニ一両だとえ大層安いね、お貰ひ申て置きやせう、小僧さんまた木挽町の方へでもお使に来たらお寄んなせえ、私は歌舞伎座附の茶屋で武田屋の兼吉てえもんです、何日でもちよいと私をお喚びなさりや ア好い穴を見

附けて一幕位見せて上げらア、何うも大きに有難うがした。大層お世辞がよくなつて帰りました。入違つて這入つて来たのは、小倉の袴を胸高に穿締めまして、黒木綿紋付の長手の羽織を着し、垢膩染たる烏打帽子を被り、巻烟草を咬へて居ながら、書生「ヤー御免なさい。若「へい入らつしやいまし、何卒此方へ…。書生「アー僕はね開成学校の書生ぢやがね、朋友共の勧めに依れば何うも君は世辞が無うて不可ぬ、些と世辞を買うたら宜からうちうから、ナニ書生輩に世辞は要らぬ事ではないかと申したら、イヤ然うでないと、是から追々進歩して行く此時勢に連て実に此世辞といふものは必要欠くべからざるものぢや、交際上の得失に大関係のある事ぢやから是非とも世辞を買うたら宜からうと云ふ忠告を受けたのぢや、僕も成程と其道理に服したから出かけては来たものの奈何せん、さう沢山余財がないから成べく安いのを一つ見せてくれ。主人「へい畏りました、書生さんのお世辞だよ、エヽ此手では如何でげせう。ギイツと機械を捻ると中から世辞が出た。発音器「アヽ杉山君何うか過日は何うも僕が酷く酔うた、前後忘却といふのは彼の事かい、下宿へ帰つて翌日の十時過まで熟睡をして了うたがアノ様に能う寝た事は余り無いよ、君はあれから奥州の塩竈まで行つたか、相変らず心に懸けられて書面を贈られて誠に辱ない、丁度宴会の折君の書状が届いたから、披く間遅しと開封して読上げた所が、皆感服をしたよ、何うも杉山は豪い者ぢやの、何うも此行文簡単にして其の意味深く僕等の遠く及ぶ処ではない、斯う云つて皆誉めて居つたぜ、跡の方に松嶋の詩があつたの

松嶋烟波碧海流　瑞岩東畔命軽舟
潮通靺鞨三千里　雲接蓬莱七十洲
一洗心身清従水　平分世界総如浮
薫風忽送他山雨　隔岸楼台鎖暮秋

とは何うも能く出来た、夫はさうと君は大層好い衣服を買うたな、何所で買うた、ナニ柳原で八十五銭、安いの、何うも是は色気が好いの本当に君は何を着ても能う似合ふぞ実に好男子ぢや、彼の湯嶋の天神社内の楊弓場の高橋のおかねの、彼が大層君を誉めて居つたぞ、杉山君は男振は好し程が好いから何を着ても能くお似合なさるツて、ナニ真実の事だぞ」。主人「エヘヽヽ此辺では如何さまで。書生「ヤー是は好いのー幾許ぢや、うむ夫は安いの、買うて置かう。銭入から代を払つて立帰りました。其跡へ入違つて来たのは、織色の羽織、結城博多の五本手の衣服に茶博多の帯を締めました人物、年齢四十五六になる品の好い男。客「アヽ御免なはれ。若「入らつしやいまし。客「アヽ大分向うも御念入ぢやなモシ、お棟上前に此お門口を通つたが実に何うも豪い木口を入れやはつて恐入ました、上方から吉野丸太や嵯峨丸太を取寄ての御建築とは豪いものや、実は何御商法をなさるのかと考へてゐました、中には彼れは無職業さんや、ナニさうぢやない質屋さんや抔云うて色々お噂を云うて居やひやりましたが、何うも世辞屋さんとは恐入つたもんです、段々承はれば蓄音器から御発明になつたと云ふ事を聞きましたが豪いもんや、何うしても是からの世界に世辞と云ふものは無ければならぬ、必

要のものぢや、と云ふ所にお心を附けて蓄音器から斯ういふ発明をなさると云ふは、当家の御主人に夫だけの学問もなければならず、お智恵もなければ出けんことぢやが、何うも結構な御商法ですな、若しアヽ何うも此お襖は何どす、銀錆で時代が十分に見えますな、此方は古渡更紗の交貼で、へえー何うも能く此位お集めになりましたな、へい、戴きます、何うも此お煎茶の器械からお茶碗からお茶托まで結構尽め、中々〳〵お店や何かで斯ういふものを使ふお店は無い事で、何うもお菓子まで添へられて恐入ます、へえ頂戴を……何うも流石は御商売柄だけあつて御主人は愛嬌があつてにこやかなお容貌、番頭さんから若衆小僧さんまで皆お子柄が宜いなモシ、実に惜しいやうですな、エヘヽヽ表を通る女子達は皆立留る位のもんで、斯ういふ珠揃のお方々が居て世辞を商ひして居らつしやる処へ買に来ましたのは手前共の仕合で、世辞の好いのがありましたら二三個頂戴しませうか。主人「これ〳〵早く箱を片附なよ。客「ナニ片附ぬでも宜しい、手前は世辞を買に来たのです。主人「イヽエ何ういたして手前共では仲間売は致しませぬ。

青空文庫情報

底本：「明治の文学　第3巻　三遊亭円朝」筑摩書房
　　2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行
底本の親本：「定本　円朝全集　巻の13」世界文庫
　　1964（昭和39）年6月発行
入力：門田裕志
校正：noriko saito
2009年8月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

世辞屋

三遊亭円朝

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/